

ニーチェは、どのように涅槃を理解したか

湯 田 豊

序 論

西洋思想史において特にわたくしが興味をそえられるのは、ヘーゲル (Georg Wilhelm Friedrich Hegel, 1770-1831)、ニーチェ (Friedrich Nietzsche, 1844-1900)、およびフロイト (Sigmund Freud, 1856-1939) である。『インド哲学の諸問題』⁽¹⁾においてヘーゲルを、『宗教とは何か』⁽²⁾においてフロイトを、わたくしはかなり詳しく扱った。ニーチェに関しては、「ニーチェと仏教」というテーマで論じたことがある。しかし、ここでは焦点をニーチェの涅槃観に合わせ、彼が仏教、特に小乗仏教の涅槃をどのように理解したかについて、この機会にわたくしは少しばかり検討してみたい。

ニーチェは、反キリスト者として広く知られている。ニーチェはストレイトにキリスト教を攻撃し、いわばこの宗教に止めを刺そうと企てた。しかしながら、ニーチェは決してキリスト教だけを攻撃目標として選んだわけではない。宗教そ

のものをデカダンスとみなし、彼は仏教をも痛烈に批判した。ニーチェは仏教をキリスト教と同じようにニヒリズムの宗教であるとみなしたけれども、この二つの宗教がかなり異なっていることを指摘することを忘れなかった。ニーチェは、仏教をある程度高く評価している。しかし彼の仏教に対する態度は、典型的なアンビヴァレンツである。しかし、ここでは、わたくしはそのことには触れない。「ニーチェと仏教」において、この点に関して、わたくしはすでに述べているからである。

このエッセイにおけるわたくしのテーマは、ニーチェがどのように涅槃を理解したかということである。涅槃 (Nirvana) に関するニーチェの見解を検討する際、ニーチェが何に、反対したか、何を彼は克服しようとしたか、何が彼の問題であったか、という三点にわたくしは特に留意した。ニーチェの涅槃に関する見解をもっともノーマルに反映する幾つかの典型的な陳述にハイライトを当てて、彼の涅槃観を検討してみたい

ニーチェは、どのように涅槃を理解したか (湯 田)

ニーチェは、どのように涅槃を理解したか(湯田)

——このようにわたくしは思う。しかし極めて残念なことに、ニーチェは涅槃そのものについて具体的に論じていない。涅槃に関する彼の記述は、あまりにも僅かである。しかし利用出来る極く僅かの資料に基づいて、わたくしはニーチェの涅槃観ないし彼自身の哲学的な思考を検討しよう。

(1) 無としての涅槃

ニーチェは若い時にシヨウペンハウアー(Arthur Schopenhauer, 1788-1860)の哲学に遭遇し、ドイッセン(Paul Deussen, 1845-1913)と親交があった。にもかかわらず、彼の著書においてニーチェは仏教に僅かしと言及していない。彼はシヨウペンハウアーから大きな影響を受けたと言われる。意思をニーチェが強調したのは、まさにシヨウペンハウアーの影響である。しかしそうはいうものの、一八七二年に出版された彼の処女作『悲劇の誕生』(Die Geburt der Tragödie) 21においてニーチェが述べていることは、われわれの注目に値する。

そこでは、彼は涅槃を無として理解しているように思われる。この箇所では、確かに涅槃という語は使用されていない。しかし、それが言外に無(Nichts)を意味することは明らかである。『陽気な科学』(Die fröhliche Wissenschaft)は、一八八二年に出版された。一八八六年に刊行されたその第二版に対する序文³において、ニーチェはあのオリエント風の

無(Jenes orientalische Nichts)を涅槃と呼んでいる。無が涅槃を意味するという解釈は、現代の仏教学においてはもはや時代遅れである。しかし一九世紀のヨーロッパにおいては、このような解釈は有力であった。いずれにせよ、ニーチェが涅槃を無として理解していたことを、われわれは銘記すべきである。

ニーチェ流に考えれば、涅槃は無時間の領域である。それは、時間の流れとは無関係である。そのような涅槃観を拒否して、ニーチェは時間の流れのなかにとどまろうとした。それゆえに『悲劇の誕生』21において、彼は次のように言っている——

・・・そもそも無へのあこがれに耐えるようになるためには、インド仏教は空間、時間、および個体を超えて、あの稀な恍惚の状態を高めると共に、それらの状態を必要とする。

ニーチェによれば、『あの稀な恍惚の状態』は、もちろん、涅槃を意味する。しかし無について、ニーチェは極めてユニークな解釈をしている。無は、単なる無ではない。ニーチェの考えによれば、存在と無は同一である。例えば『道徳の系譜』(Zur Genealogie der Moral)において、ニーチェは無を神(Gott)として理解している⁴。神との神秘的合一への欲求が無、涅槃への仏教徒の欲求に他ならないというのが、ニーチェの到達した結論である。そして涅槃は、同時に事物の根拠

でもある。⁽³⁾

結局、ニーチェの理解する無は、単なる無ではない。それは、同時に存在でもある。それゆえに彼は、『反キリスト者』(Der Antichrist, 1895)において、次のように言う――

人は、『無』とは言わない。その代わりに、人は『来世』あるいは『神』あるいは『真実の生命』、あるいは涅槃、救済、祝福と言う。

涅槃が無であり、仏教徒はそれにあこがれるという見方を、ニーチェは終生変えなかった。彼の最後の作品となった『ニーチェ対ヴァーグナー』(Nietzsche contra Wagner, 1889, Epilog)においても、彼は実質的に涅槃を無として理解している。しかし心理学的には、『涅槃』は「そのなかで人が苦しむことのない一つの世界」(eine Welt, in der man nicht leidet)である。⁽³⁾ 苦しむことのない世界を求めるがゆえに、仏教徒はこのよう、な無にあこがれる――これがニーチェの涅槃観のハートである。変化しない世界は苦しみから解放された世界であり、そのような世界が涅槃である。われわれが生きているこの世界は無常であり、苦に満ち、変化せざるを得ない。しかし、このように絶えず生成し消滅する世界には永続的な幸福は見いだされない。初期仏教において、涅槃(nibbana)は生成、消滅、および変化を免れているものとして理解されている(Anguttara-nikaya, 3, 47)。要するに、テー

ラヴァーダ仏教における涅槃は、『苦しみの終わり』(Tilana, 8, p. 80)である。

ニーチェによれば、仏教の涅槃は「そのなかで人が苦しむことのない一つの世界」である。そして、この世界は同時に変化しない世界、すなわち、無である。仏教徒が「消滅するもの、変動するもの、変化するものに對する輕蔑、憎惡」を抱いていた、とニーチェは推量する(『力への意思』Der Wille zur Macht, 586)。変化に對する恐怖が、人をして持続的なもの、変化しないものを求めさせるというわけだ。変化することのない世界、すなわち無が、ニーチェの理解する『涅槃』そのものである。

ニーチェによれば、涅槃は苦しみに對して敵対的である。あるいは同じことだが、それは生に對して敵対的である。この世およびあの世という二つの世界を想定すれば、涅槃はあの世であると考えられよう。しかし初期仏教の中心思想は、このような二つの世界ないし二つの真理を容許しない。しかるにニーチェは、涅槃をあの世(ide andre Welt)であると考へた。彼にとって、あの世は非存在・無(Nicht-sein)の同義語である(『力への意思』(Der Wille zur Macht, 586)しかし、大地に忠実であることを欲し、この世しか認めないニーチェにとって、『あの世』、あるいは『無』、あるいは『真実の存在』は、すべて人間の創作した虚構に他ならない。従って、

ニーチェは、どのように涅槃を理解したか（湯田）

ニーチェのこの考えを徹底させれば、涅槃もまた一つの虚構であるということにならざるを得ない。

もしも涅槃が無ないし存在として解釈されれば、「存在は一つの空虚な虚構であり、外見上の“世界だけが唯一のものである。”“真実の世界”は、単にウンによって付け加えられたものにすぎない」（『偶像のたそがれ』（*Götzen-Dämmerung* III, 2））ということになる。しかし一つのフ、イ、ク、シ、ン、としての涅槃は、どのようにして作られたのであろうか？ キリスト教と並んで仏教をニヒリズムの宗教あるいはデカダンスの産物とみなすニーチェは、“あの世”あるいは“涅槃”を捏造したのは生の倦怠の本能（*der Instinkt der Lebensmüdigkeit*）であると言う（『力への意思』（*Der Wille zur Macht*, 586））。頽廢した生の捏造した世界が、すなわち無_二涅槃である。現実に存在するのは“この世”だけであり、この世の生に倦怠した人々がそれに対立するものとして“あの世”あるいは“涅槃”を捏造した——これが、ニーチェの解釈である。生の本能ではなく、生の倦怠の本能が涅槃という幻影を生み出したとすれば、涅槃は神聖なウンであるということになる。

しかし初期仏教においては、涅槃は決して“この世”に対立する“あの世”、あるいは“真実の存在”ではない。無造作に、わたくしはニーチェの涅槃観を誤りであるとして拒むことも出来る。しかし、事柄はそのように単純ではない。涅槃

涅槃を通じて、ニーチェはインド的ないし仏教的なもの、方、あるいは生活感情、もつと正確に言えば、仏教的な価値観に挑戦したのである。インド的エトスとヨーロッパ的エトスを比較し、それぞれの特徴を浮彫りにすることが、わたくしのテーマでなければならぬ。ニーチェの涅槃観は、そのための一つの有力な手掛かりである。

（2） 涅槃——現実逃避への道——

ブッダとは異なり、ニーチェは苦を廃棄することを欲しなかった。この人生に苦しみが存在することを、ニーチェは決して否定しない。人間が苦しむというのは、現実の出来事である。しかし彼は苦を除去しようとは望まなかった。この点において、彼はブッダと決定的に異なる。ヨーロッパのブッダを自負するニーチェにとって、涅槃は現実逃避を意味する。ニーチェによれば、仏教が現実逃避であることを示す徴候は“意思の否定”（*Vernichtung des Willens*）である。彼の思考方法に従えば、仏教においては——キリスト教の場合と同じように——意思が病んでいるのである。『陽気な学問』134において、ニーチェは極めて注目する発言をしている。この箇所において、彼は次のように言う——米を常食したため、インド人は活力を失い無気力になってしまった、と。米食をする人々が無気力になるかどうかは、もちろん、ここで

直ちに断定出来る性質の問題ではない。ここではただ、わたくしはニーチェのこの発想に読者の注意を喚起するだけにとどめよう。

ニーチェによれば、涅槃とは人が催眠術にかけられている状態である(『道徳の系譜』17. 第三の論文)。このような状態においては、米食のため無気力になった人は意思を失って、無抵抗になる。そういう状態においては、涅槃は善惡の彼岸にあり、一切の願望から自由である。『道徳の系譜』(同上)において、ニーチェは涅槃に関して次のような考えを明らかにした。無の催眠状態の感情あるいは催眠状態における無の感情、もっとも深い眠りという休息、要するに、苦しみのない状態(Leidlosigkeit)が「最高の善」、「価値の価値」である——このように、ニーチェは理解した。しかしニーチェは、この箇所では「涅槃」という語を使用していない。彼が使用している言語は「最高の状態」、「解脱自身」である。しかし、これらの言語によって表現されるものが涅槃であることは明らかである。苦しみのない状態が、ここでは「価値の価値」、すなわち涅槃である。

ニーチェが涅槃を無とみなしたことは、すでにしばしばわたくしが述べた通りである。しかし無は、同時に食欲および激情の否定としても理解される(『力への意思』57)。しかし、このような涅槃観は、わたくしに初期仏教徒のそれを思い出

させる。『ディイガ・ニカーヤ』は涅槃を人を再生に駆り立てる渴きの止滅(14・3・1)、あるいは渴き、憎惡、および妄想(ニ貪・瞋・痴)の三毒からの解放(16・4・43)として定義している。渴きないし三毒を除去して存在の苦しみから解放されることが、初期仏教における「価値の価値」、すなわち涅槃である。この限りについて、ニーチェの涅槃観は初期仏教のそれにある程度歩み寄る。

しかし、仏教の理想は苦の廃棄である。初期仏教に関する限り、苦は除去されるべき何かあるものであり、苦しみ自体には何の価値もない。しかるにニーチェはすでに、『悲劇の誕生』において、このような価値観から決定的に離反した。ウォルター・カウフマン(Walter Kaufmann)によれば、「すべての苦しみと残酷さにもかかわらず、人生を崇高で美しく、しかも楽しいものとして人が肯定することが出来ることを、ニーチェは悲劇を通じて学ぶ」のである。ニーチェは、決して苦の除去を提唱しない。苦を除去する代わりに、彼はむしろ苦しみを肯定し、苦しみを通じて人間として大きくなることを自己の哲学の主要テーマの一つにした。初期仏教においては苦の終わりが涅槃であり、苦を除去して初めて人は涅槃に入ることと許される。しかるにニーチェは、あるがままの人間存在の価値をそのまま肯定する。苦しみ、大いなる苦しみという規律を通じて、人間は今まで向上して来たのではない

ニーチェは、どのように涅槃を理解したか（湯田）

いかというのが、ニーチェの発想である（『善悪の彼岸』（*Jenseits von Gut und Böse*, 1886 第6部、225参照）。仏教においては、「あなたはどのようにして苦しみを免れるかという問いが全精神的食餌法を規制し、そして制限する」（『反キリスト者』（*Der Antichrist*, 20））のである。ブッダの教えによれば、苦しみを免れることが「涅槃への道」である。そして、涅槃は健康を増進する！ 実に、「涅槃は最高の幸福である」（『法句経』*Dhamma-pada*, 204）。まさに涅槃は、仏教的な意味での精神療法に他ならない。すべての苦しみからの解放を約束する涅槃は、一種の快樂原理である。しかるに快樂原理を拒絶するニーチェは、涅槃を生活に倦み疲れた人々の理想とみなした。人生の問題を快樂、および不快の問題に還元することを、ニーチェはその遺稿において断固として拒絶する（『力への意思』64）。

仏教徒の理想は涅槃である。涅槃という言葉を使用しないで、ニーチェはそれについて次のように述べている——

彼らは非存在・無（*Nicht-sein*）への道を捜し求め、そしてそれゆえに、彼らはすべての激情的な衝動を忌避する。例えば、復讐するな！ 誰かの敵になるな！ 倦怠した人々の快樂主義が、ここでは最高の価値基準である・・・仏教の理想においては、善悪からさえの解放が本質的であるように思われる。（『力への意思』155）

このように、生きるのに倦み疲れた人々の快樂主義が涅槃の觀念を決定する。永続的な幸福は、キリスト教の場合と同じように、仏教徒にとっても理想的である（同上、159）。そして、このような永続的な幸福が仏教における涅槃である。「そのなかに苦しみが全く存在しない世界」——それが涅槃である。しかしニーチェは、このような仏教的快樂原理を受け入れることを拒んだ。

快樂原理の代わりにニーチェが選択したのは、力（*Kraft*）、行為（*Tat*）、および欲望（*Begehrt*）であった（『力への意思』70）。苦しみの止滅を説く代わりに、彼はその必然性および変容を強調した。人生は苦しみであるというのが、仏教を成立させた第一の命題である。人生が苦であることを認めなければ、仏教は成立することが出来ない。ここにおいては、渴きないし無知を滅することによって苦しみおよび再生に終止符を打つことが、「涅槃への道」である。しかるにニーチェは、人生を苦しみであるとはみなさなかった。また彼は、人生を悪であるとも考えなかった。われわれの人生が根底において「現象のあらゆる変化にもかかわらず、破壊出来ないほど力強く、歓喜に満ちている」ことを、ニーチェは『悲劇の誕生』7において、生き生きと美しく描いている。

ニーチェが初期仏教の涅槃のアンティテーゼとして提唱したのは、芸術である。なぜ、彼はそうしたのであるのか？

「芸術は本質的に存在の肯定であり、祝福であり、神格化である」(『力への意思』821)からである。「苦しんでいる人の救済としての芸術——苦しみが欲せられ、変容され、神格化され、苦しみが大いなる歓喜である諸状態への道としての芸術」(同上、853)——まさに、これが涅槃に代わるべき「価値の価値」である。ニーチェのこの解釈に従えば、涅槃に入ることとは現実逃避以外の何ものでもない。むしろ、われわれは苦しみを欲すべきであり、それを変容させることによって、苦しみが大いなる歓喜になることを知らねばならぬ。苦しみは、除去されるべきものではない。苦を避けることを、ニーチェは否定した。苦を避けて無という名の涅槃のなかへ戻ることを、ニーチェは「意思の病い」(Erkrankung des Willens)であるとみなした(『陽気な科学』、第二版への序文3)。ニーチェによれば、意思の病いのルーツはキリスト教および仏教のなかに見いだされる。

意思の病いが「涅槃」を成立させた——これがテラヴァーダ仏教における涅槃に関するニーチェの見解である。しかるにニーチェは、意思の病いの所産としての涅槃に意思、あるいは「力への意思」(der Wille zur Macht)を対立させた。創造を可能にするのは「意思」である——これが、ニーチェ哲学を代表する思想の一つである。力への意思というのは、要するに、自己自身のなから何かを創造しようという意思

である。ニーチェによれば、人類最高の目標は創造、あるいは創造性である。「涅槃」対「力への意思」は、「意思の病い」対「創造性」によって置き代えられる。ニーチェが涅槃への逃避を求めず、意思あるいは力への意思を強調したのは、実に彼が創造を人間性の本質とみなしたからに他ならない。苦しみを欲し、苦しみを変容し、苦しみを大いなる歓喜としてあるがままに肯定するのが、ニーチェ哲学のハートである。苦しみを通じて、偉大なる価値を創造することを、ニーチェは彼の哲学において目指した。

結論

(a)、ニーチェは何に反対したか？ ニーチェが反対したのは、涅槃によって代表される「苦しみの全く存在しない世界」であった。ニーチェにとって真に存在するのは、「この世」だけである。この世と別に他の世界が存在するはずはない。それゆえに、全く変化しない、従って苦しみを完全に免れた「真実の世界」ないし「無」(「涅槃」)は、大いなる幻影の上に築かれた一つの虚構である。この意味で、涅槃は神聖なウソである。

(b)、ニーチェは何を克服しようとしたか？ 彼が克服しようとしたのは、涅槃という名の快樂原理である。彼は変化を愛し、苦しみを通じて自己自身を克服しようとした。まさ

ニーチェは、どのように涅槃を理解したか(湯田)

に、超人(Übermensch)が彼の目標であった。人間は克服されねばならぬ何かあるものである!

(c)、何がニーチェの問題であったか? 『力への意思』における彼の問題の一つは、インド仏教ないし歴史的仏教をヨーロッパの仏教ないし仏教のヨーロッパ的形態と対比させ、ヨーロッパ仏教を未来のヨーロッパ文明の基礎にすることであった。ニーチェがヨーロッパの仏教という語の下に理解したのは、力への意思を基調とする積極的ニヒリズムであった。まさにニヒリズム(Nihilismus)および永却回帰(Ewige Wiederkehr⁽⁹⁾)の両学説の融合が、ニーチェにおけるヨーロッパ仏教の真の意味である。『仏教のヨーロッパ的形態』を正しく理解するためには、われわれはニヒリズム、価値の価値転換、力への意思、および永却回帰などの諸学説を綿密に、しかも実質的に検討しなければならない。

1 二七九—三六六ページ。

2 一六四—一九九ページ。

3 『印度学仏教学研究』第三十二巻第一号。昭和58年12月。四〇—一四〇六ページ

4 Dritte Abhandlung, 17. 本論文において、わたくしはテクストとして Friedrich Nietzsche *Sämtliche Werke Kritische Studienausgabe in 15 Bänden*, Hrsg. von Giorgio Colli undazzino Montinari を使用した。ただし、ニーチェの遺稿に「つづて」わたくしは Friedrich Nietzsche *Sämtliche Werke*,

Der Wille zur Macht (78), Kröner Taschenausgabe を使用した。Nietzsche *Werke Kritische Gesamtausgabe*, Hrsg. von Giorgio Colli undazzino Montinari 30 vols., 1967-78 は、もともと信頼に値するテキストであると言われる。わたくしは、この全集も部分的に参照した。

5 『道徳の系譜』第三論文、17。

6 本書が実際に執筆されたのは一八九五年。

7 *Der Wille zur Macht*, 585

8 Friedrich Nietzsche *The Birth of Tragedy and The Case of Wagner*, tr. by Walter Kaufmann, 1967, p. 59.

9 ニーチェは、情熱を高く評価した。インド密教とニーチェの比較については、わたくしの著書『仏教思想史』二四—二四二ページ参照。

10 私見によれば、ニーチェの永却回帰と仏教の輪廻(samsara)との間には本質的な類似は存在しない。この点については、Stanbaugh, J. *Nietzsche's Thought of Eternal Return*, The Johns Hopkins University Press 1972, pp. 17-19 参照。ニーチェの立場から見れば、輪廻は回帰の思想の回避を代表する。人間存在が無の終末を迎えることなく、何の意味もなく、何の目的もなく永遠に回帰するという思想が、ニーチェの『永却回帰』の学説である。そしてニーチェは、全く同一の事物の繰り返しという意味での回帰をそのまま肯定した。しかし大河内了義氏は、永却回帰と輪廻の間に著しい親近性、本質的な類縁性が存在することを認める——『ニーチェと仏教』法蔵選書18、一六四ページ以下参照。(神奈川大学教授)